

人間の世界から争いが無くなったことはないと言われていきます。それを仏教にたずねてみたいと思います。仏教は人間の心を深く見つめていて、その心は無意識に、自分は正しく、他人(ひと)が邪(まちが)っていると感じていて、教えています。

この自分が正しいとの心から争いが起こり、他人(ひと)を責めたり、批判したりします。このことを仏教から教えられた先人たちは、その中でも争わない人生を歩まなければならぬと考えて、二つのことを実践しました。一つは家庭教育によって人間は他人(ひと)との関係で生きていくから、相手の立場を理解できる人間になること。そういう人間になれば無駄な争いは少なくなります。もう一つは争いが起きた時、間に人が入り両方の言い分を聞いて、両方の顔が立つように、まるく治める。これが仏教文化の中で社会を生きてきた日本人の倫理観でありました。

しかし、現代ではそれが無くなってしまいました。争いが起きても間に入る人もいません。そして誰かに責任を取らせて、辞任させれば一件落着のようになっていきます。しかし辞めさせられた方は心から納得していません。このような現代ですから、どうしてもギスギスした感じを拭うことができません。

もう少し仏教的なものの考え方を心に入れてぬくもりのある社会を実現したいものです。

